

## 九州大学装置利用料金・受託料金の計算についての考察

先導物質化学研究所 物質機能評価センター 研究支援室 出田圭子  
tel&fax (筑紫)8898 [keiko@cm.kyushu-u.ac.jp](mailto:keiko@cm.kyushu-u.ac.jp)

先導物質化学研究所物質機能評価センターでは、大型の分析装置を備え、九州地区の拠点として、また全国的にも魅力ある分析を行う部署として多くの顧客を得ている。すると当然、分析料に関する事務も重要で、請求を行うための様々な手続きを行う必要がある。

今回は中でも最も基本的な分析料の算出について、技術職員の方々と情報共有したいと思う。

### 分析料の計算は妥当なのか

物質機能評価センターの依頼分析は中央分析センター規則の料金規定にその料金が載っているため、学内では競争的資金等での支払いが可能であるし、学外に対して請求書を発行することができる。料金表に載せる分析料は九大の事務的に審査を受けた方法に則り算出される。大まかに言うと以下のような内容となっている。

$$\boxed{\text{機器損料}} + \boxed{\text{光熱水料}} + \boxed{\text{消耗品}} \left( + \boxed{\text{技術料}} \right)$$

※技術料は受託分析のときのみ適用される。

内容についての詳細と現場で実際に外部のサンプルを請け負うものとしての疑問点も含め列記する。

○機器損料とは聞きなれない言葉であるが、計算式では、

(取得価格) × (耐用年数を考慮した残存率) から時間あたりの機器使用料金を算出し、測定時間を乗じて求める。いわば機器本体の使用料である。通常分析機器の価格は数千万円から数億円に達するものがあり、新しい装置であれば、たとえば1億円の装置の1時間当たり機器損料は約5万円と利用者にとってはキビシイ数字がはじき出される。耐用年数が短く価値が急速に下がる割には価格の改定がめったに行われないことも、実は問題である。

○光熱水料や消耗品とは、装置の消費電力や部屋の蛍光灯、プリンタのインク、紙、薬品類や試料ホルダなど測定に係る細かいものから数年に一度交換が必要な装置部品まで多岐にわたるがいずれも消耗品なので分析料に含まれるのは当然かと思われる(消費電力等の細かい点についてはここでは議論しない)。しかし、数年毎に交換するような消耗部品については過去3年間の分析件数の平均値で割ることになっており、稼働率の低い装置の場合、高額部品を少ない人数で負担することになることになりかねない。

○技術料は測定を請け負う教員・職員の「時給」である。

技術職員としてはもっとも腑に落ちないところである。高い技術は「商品」である。装置があっても技術者がいなければ結果が出ない。技術者はそれまでに専門性を磨いたから技術者なのである。算出方法に受け入れ難いのは理解するが、ベテラン技術者よりも、新人が時間をかけてやる方が料金が高い、などということにならないことを祈る。(教員が「時給」で他所のサンプルを分析するくらいなら学生の面倒を見ていた方が良い時間の使い方だ、ということ は理解しやすい気がする。)

大学の装置は国家予算で購入されたものが多く、それを使って利益を上げてはならないとされる。そのため算出方法がガチガチで、多様な測定に対応できていない部分が生じている。今後算出方法が改定されるときには、現場の意見が取り入れられることを願う。